孝明天皇紀

三十一

卷五十七
安政二年
正月二月

卷五十八
安政二年
三月

288.41
Ko563Ke
W

宮内庁書陵部

孝明天皇紀卷五十七

安政三年乾正月一日乙丑四方拜例の如し今年假皇居に依て元日白馬踏歌の三節會を停め大床子御膳を供せず

〔非藏人日記〕正月一日乙丑晴四方拜寅一刻前出御寅二刻過入御奉行職事頭辨光愛朝臣其外總參中殿代鋪設六位侍中沙汰也

〔實久卿記〕正月一日乙丑晴今年假皇居依之無三節會（依無其所也）

二日丙寅晴今年無大床子御膳

〔聰長卿記〕正月元日乙丑晴寅刻過四方拜出御之旨

小川文庫

国立国会図書館 27.6.13

270532

議奏被示兩役參御前（小御所代）御服（宮内卿高倉大夫）了御洗手

（女房沙汰）出御于中殿代（御劍實麗朝臣御裾胤保朝臣）男方供奉從中殿

代東庭下御（諸臣皆下）訖入御（供奉如前）寅半刻退出

〔言成卿記〕正月元日子刻（○子恐くは寅の誤）禁中四方拜於假

皇居中殿代東庭令拜屬星給黃櫨御袍如例云々

〔按〕今年聖算二十五御德日は卯酉なり

八日（壬申）權に後七日御修法を停む太元帥法例の如し

尋て御修法を東寺に追行す

〔非藏人日記〕正月八日壬申御修法御延引太元帥法

理性院修行御撫物被出

來十四日午刻三寶院門跡御加持參內之旨議奏卿

被申渡也

三月八日辛未於東寺被行御修法ニ付御撫物被出

依之朝餉女房塞有之

〔公卿補任〕自三月八日於東寺灌頂院被行後七日御

修法（式月法務、幷一二長者依所勞延引）阿闍梨法務前大僧正定演奉

行經之

〔後勁槐記〕正月八日自茲夜可被行後七日法（東寺灌頂院擬眞言院）之處法務三寶院前大僧正歡樂（舊臘中寒○歡樂は祝日に用ふる病の代稱）二長者理性院僧正修太元帥法（當時無手代人體）次

席眞光院僧正歡樂（幷佛具不具）無可勤修人體仍舊臘延

引於理性院本坊修太元法（如例春但御撫物自臺盤所代被出之准后御撫物

（因無飛香舍於内々方當役所代前廊下御世話光成授御祈奉行經之宮々門院如例春以表使被出）

十一日太元阿闍梨へ有賜物（如例年御内儀沙汰）於准后門院

八不賜之（是又例也）

十四日太元阿闍梨參上（拜天顔修御加持）御撫物返上（准申出予）

（依引籠准后御撫物正房卿商量）

三月八日自今夜於東寺灌頂院被行後七日法阿闍

梨法務前大僧正定□御撫物自臺盤所代簾下女房

被出之准后御撫物予於鈴下自お五百受取於八景

間代奉行へ渡宮々并門院料表使持出奉行へ相渡

伴僧交名獻上結願日御加持參内奉行伺十八日十〇

（四日の誤）午刻被仰出了

十四日御修法結願阿闍梨御加持參上日限也（中略）巳

半刻頃參内准后御撫物藏人左少辨被付之お五百

面會返獻畢

午刻（案内之後）三寶院前大僧正參上（自車寄近例清涼殿修理中自車寄參上）

取持（左衛門督）同非藏人（山城伊豫）誘引御色紙部屋代（廉香間代三帖）

（計屏風構）予出會次御祈奉行出會（御加持參上并中日御使賜物御禮被申上）

武傳面會（年始御祝詞被申入）議奏面會召止當番別段御對面

天盃事被願申内見之事予承商量專如例同半刻過

出御（清涼殿代）先三寶院武傳誘引經之申次自南廂參中

段拜天顔修御加持了退暫在廊下次仁和寺院家（尊壽院）

參下段一拜聊進修御加持（過刻申次胤保伺定）次妙心寺盤

境（申次長順）拜天顏次同物先（申次胤保）同上（○物先僧名欠）了暫入御
于御後以同所改御座爲御學問所代（先之兩番所總詰退近習モ前）
（番退當役當番近習當番等詰）御座定當番伺天氣召三寶院三寶院
（無申次）參下段拜聖顏了退暫在廊下入御之後於同所
賜天盃（當番告之天盃御獻奉行持參手長經之提新藏人）了武傳面會御禮申
置三寶院退出

（聰長卿記）正月十七日御修法御延引之事去日所司
代へ爲心得申置候處例年大樹公へ卷數被遣候事
故御延引之子細何トカ不申遣候ハテハ如何候故
表向達吳候樣以公用人申之仍議奏へ其旨申入
後七日御修法勤仕法務依所勞理二長者太元帥
法勤修次席眞光院所勞幷調度邊差支ニ付理候
間御延引猶勤仕之人體有之節可被遂行之旨被
仰出候仍申入候也

十二月三十日　實久

兩人宛

右被示仍書改所司代へ令達

十五日己卯三毬打を停め御吉書を御靈社に納む是日
前水戸藩主德川齊昭關白藤原政通（鷹司）に由て手製の
琵琶を獻す

（實麗卿記）正月十五日己卯皇居三毬打被止於御吉
書ハ被納御靈社云々

〔按〕御靈社は京都寺町頭の西鞍馬口の南にあり上御靈と稱す

〔德川家記〕安政元年甲寅十一月上略齊昭は炎上後行宮の狹隘にして宸衷を慰め奉るへきものなきを憂慮し華櫚の材を以て琵琶一面を手製し關白政通に因て之を行宮に進獻せり其書に曰く

捧鄙翰候冱寒之候殿下益御安泰被成御座奉恭賀候然ハ齊昭講武之暇琵琶一面手製仕候處甚拙劣之至ニハ候得共行宮へ進獻仕度志願ニ御座候間白干浮龜相添殿下迄爲相登候不苦候ハハ御周旋之程偏奉希候恐惶謹言

十一月廿五日　水戸中納言　齊昭花押

關白藤公殿下

二白拙作之琵琶進獻仕候意味右器之腹中へ記候間別紙一通全御内々殿下御含迄汙貴覽候以上

別紙旭琵琶銘

今茲甲寅之夏皇宮罹災駐驛於外亡幾鄂虜航海泊攝之浪華浦淹留旬餘幾内騷然臣齊昭仰想行宮狹隘無以慰宸衷俯慨醜虜猖獗未能伸皇威屢陳鄙見於征夷府而才疎論迂未審用舍如何也齊

270532

昭頃獲華櫚材長三尺許手製琵琶一面竊謂方皇宮之災雅樂寶器得無屬烏有邪乃因關白政通獻之行宮豈敢望補寶器之闕乎萬機之暇或命侍臣彈還城之樂歌太平頌萬歳洋々乎盈耳則内以紓宸憂外以鎭妖邪此器與有榮焉臣竊爲天下祝之

嘉永七年冬十一月之吉

權中納言源朝臣齊昭謹識

翌安政二年乙卯正月十一日琵琶京師に達するや鷹司政通直に之を傳獻せしに叡感斜ならず渥き勅語を賜はれり同十七日政通の報答書に曰く

玉章令拜誦候益御安全令恭賀候講武之御閑御手造之琵琶一面殊木筆御詠則同日令傳獻去十五日出仕勅語之砌不斜叡感面白仰厚可傳御沙汰外ニ名産別而御藥可被供御膳中略先ハ御答迄如此候也恐々謹言

正月十七日　政通

拜答

追申正月十一日到著直ニ傳獻候則御思惟書之寫も入天覽候御忠節之儀深暎感ニ候尚幾久敷御祕藏厚可申述仰ニ候每々色々御心入之品御進獻大方ならず御滿足ニ候事下略

〔附錄〕

〔久我家記〕正月廿六日從橋本家內々入御覽候水戸侯自作之劍御短刀一振獻上無子細旨兼テ從殿下モ水戸へ可被仰遣存心有之處ト申儀從橋本可通達被示今日橋本家へ行向其旨申入置

十八日壬午 和歌御會始

〔公宴御會寫〕

正月十八日御會始陽春布德

天地のよろつのみちのなれるよりつれていろまさ春やいくはる

讀師右大將　講師經之　發聲源宰相中將

題者奉行等新侍從三位

〔後勁槐記〕正月十八日和歌御會始未二刻出御申刻入御（今度小御所代上段簾中御座於中段被讀上御文臺被用蒿細道帥宮中段右大將以下下段奥端對座經之候御椽座敷）未刻出御御簾動奉行新侍從三位（雅典直衣）紅單元右大辨宰相資宗依所勞辭退替退告召帥宮（直衣紅單）讀師右大將（基豐）直衣紅單講頌鷲野（○野は尾の誤）前大納言（直衣白單同袴八十一歲）同新中納言（實德直衣紅單）同按察前中納言（有長直衣紅單）發聲源宰相中將（重胤衣冠紅單）講頌大原三位（衣冠紅單）同持明院三位（同上）奉行講頌新侍從三位講頌左衛門督（爲理衣冠紅單）參進講師經之（東帶）讀師以下進退如例但非板敷之間無安座御製御座以北自簾下女房被出之（總詰差袴新加之輩聽聞如例獻如例）

〔實久卿記〕正月十八日壬午晴午初刻參皇居今日和

歌御會始也（中略）未下刻出御于小御所代（簾中）有披講讀
師右大將（基豐）講師經之發聲源宰相中將（重胤）了入御題
者奉行等新侍從三位（雅典）申刻許退出

〔俊克卿記〕正月十八日壬午晴辰上刻參仕和歌御會
始也粗如每例但御場所御狹少ニ付簾中出御也且
不板敷之間講師讀師不用圓座

〔中將內侍房子記〕正月十八日和歌ハ會始八ツ過頃
ハ表くしハちてにて言上有小ハ所代上段ハすい
れんにて在ぜられハ直し（衣）ハはかまにて出御成
ハ劍長はし反もち參らるゝハろらたき有七ツま
へハする〳〵と濟ぜられハ小ハ所代にて二てん
ハ盃まいる（下略）

〔附錄〕

〔言渡〕正月十八日新侍從三位被附以楸丸上如小註
以左馬權頭被仰出申渡候（○久我從一位附箋に云此小註ハ議奏口ッカラ）
（申渡スナリ奉行ニテ心得ニ被書付更ニ被爲見候事）
御製讀師講師可被召別人哉之事（不被召別人）
御製內々拜見之事（爲見可被下）
反數之事（例之通）
准后御歌可被讀上哉之事（不被讀上）
女房歌可被讀上哉之事（同上）
出座親王丞相點者所役講頌輩歌可被讀上哉之

事可被讀上

〔按〕今年數次御當座あり今其記事を略して左に御製を謹抄す

〔公宴御會寫〕

七月十九日擣衣

あはれさもいはん方なくきこゆるはしつか夜寒のきぬたうつ聲

同月廿七日祝

殿つくる其聲〻のにきはひをきくにたのしきちよのゆく末

八月九日櫻柳交枝

佐保ひめの手引の糸の青柳になひく櫻や袖のぬひもの

十月十四日落花風

吹からに風のしわさとうらみけりおのれと花のちるもましるを

十二月十八日花雪

雪ならは匂ふ春日に消ぬへしきえぬや花のさかりなるらん

二十三日 丁亥 秋葉山に火災を祈禳す

〔言渡〕正月十四日油小路中將參上被居以表使申入伊豫面會遠州秋葉山臨時御祈今年巳無午別而無

火災寶祚長久御祈來廿三日ヨリ一七箇日勤修被
仰出候旨被屆候

〔按〕巳無午は二月一日午日に當るを謂ふ蓋舊
說に巳無午の年は火災多しといへり卽去年
今年其支に當る故に此內旨あり油小路隆晃の
之を傳ふるは其執奏家たるに由る安政四年
亦京師火災の流言あり御祈例の如し卽左に
附す

〔久我家記〕安政四年五月二十四日從長橋局以大御
乳人被示內々此頃世上色々風聞有之革堂邊○寺町通
丸太町南ヨリ出火ニテ下御靈邊○革堂北燒失ニ相成旨黑
雲下リ候由ナト咄有之旁秋葉山へ年中靜謐之御
祈被仰付度間明日中油小路中將可召設被申出卽
召設

是月右大臣藤原忠熙近衛內旨を奉して薩摩藩主島津
齊彬等に宸筆の御製を授く

〔宸筆御製〕島津家藏

詠寄國祝　和歌

武士もこゝろあはして秋津すの國はうこかすと
もにおさめむ

〔忠熙公記〕正月廿八日壬辰從薩摩自關東也有馬次郎右
衛門被差登今日時候見舞使ニ來ル內用向ニ付被

差登旨也内實ハ舊冬申遣置候ニ付テ也子細ハ昨年來格別ニ内獻物モアリ格別之叡慮ニテ宸翰ヲ賜旨也極密之事故得淨院ヲ以テ密々相渡スヘキ旨申置

〔島津家文書〕

齊興朝臣齊彬朝臣か國政にあつき心さしを叡感淺からすつね〳〵仰ことゝもありしにてたひ武士も心あはしての御製を御懷紙に宸筆染られて傳へよとあつき仰ありしをかしこみて

武士のこゝろも君かめくみもてけにいやましに國やおさめんとつたなき筆ことはも後のしるしにもならむとかき添て傳へ侍るもの也

安政二とせの春　右大臣忠熙

さつま

宰相との

中將との

〔備考〕

〔史談速記錄〕明治廿七年四月舊薩摩藩士市來四郎演說　御製を齊興齊彬に賜りましたは安政二年三月の事と見えますが日は分りませぬ安政元年の春齊彬は參府致しました其途次伏見驛滯在中例の如く近衛家に參殿致しましたさうです云々何か國事上の御談がご

ざりまして夫に對しての事でもございましたかと考へられます一説に其時齊彬は何か密奏致しましたと申事でございます當時御苦心の折でもございますし意見書の趣餘程叡感あらせられたと申事でございます然して齊彬は江戸に出まして後近衛家より御密書が參りまして宸翰と勅詠を下されたから誰ゞ拜受の爲め人を遣はせと忠熙公から仰遣されたさうでございます其處で齊彬は納戸奉行有馬次郎右衛門と申者を上京致させまして御製と宸翰を拜受致しましたと見えます

○前略

二月七日庚子異星西方に見はる

〔言成卿記〕二月七日降雨入夜晴異星顯西方天凶可恐

○此事他書に所見なし

十四日丁未紫宸殿代右大臣藤原忠熙近衛第に渡御櫻花を觀給ひ御製を忠熙に賜ふ

〔宸筆御製〕近衛家藏

安政二年きさらきなかの四日かねて約し置たる近衛の亭に行むかひ名にしおふ糸さくらを見て

昔より名にはきけとも今日みれはむへめかれせぬ糸さくらかな

見れとあかぬ風をすかたの糸さくら花のいろ香
は長くし日も
をのつからこゝろも花に匂ふまていとに櫻の咲
つゝく頃
青柳の千すちのいとに香をこめてさくかとおも
ふ花のいく本
いとさくらいと長き日もくり返し風のまに〳〵
なひく花房
午の時ころよりとき〳〵雨ふりけれは
是もまたあかぬなかめとなりて鳥さくらかいと
にかゝる春さめ

いと櫻いとよりかけてふる雨にはなの色香もろ
ふこゝちせり
また〳〵雨は晴て日かけもはなの上に照ろへ
は
村さめの晴行あとに春の日やはなの光をみかき
添つゝ
春さめの晴ゆく跡のいとさくらかすろふ花や露
のしら玉
黄鳥小蝶なと花にたはむるゝも又興ありて
花の香をめつるこゝろかいと櫻いとのとかにも
あろふ小蝶は

糸さくら枝つたひする緑鳥のをのか羽色は若葉
とも見ゆ

咲つゝく花の色香をしたひてやいとにみたるゝ
春のうくひす

夕景にも成ぬれは酒のたくひとりかはし今日
はめつらしく男方を召寄花の宴催さすときに
右のおほい臣より數〻儲物ありけれは喜のあ
まりかくろ有鳧

花のときあふてふさへも嬉しきをこゝろつくし
の人のなさけは

高坏に菓子肴物なと盛ありろの取合松藤の作
もの有けるを見て

けふこゝに千世を重ねてたつ松にちきりてめく
れ春のさかつき

松ふちのたてる姿を種としてことはの花も咲さ
かふらん

夕景にもなりて猶更空もとく晴日影もうつろ
ひし氣色又たくひなけれは

花のうへに夕日のかけのうつろひてさらに色ま
す庭の面かな

日のかけはおさまる頃のはなの上をさらにてら
していつる月哉

色みえぬたろかれ時の花の上にほのめきわたる

けふの月影

追〻にき〳〵しく盃もへたてなくめくりて

やはらくる人のこゝろも花ゆへと猶よをかけて

めくるさかつき

とく暮て月も光ろひさやかにはなをてらす氣

色又たくひなくおほえつゝ

けたれけむ春のよなからかすまぬは月もさくら

の花の色かに

誠に雪月花ひとつの氣色のたもしろさに

雪とのみ梢に花のさく色もみかきろへたる月の

かけかな

其より庭へ下たち木の本に打つとひて

この本に打つとひつゝなかめてもてゝろの花の

色は匂はす

月のかけ花の光もいやましてはるとはみえぬ庭

の面かな

おもしろやさすさかつきに影みえて月もかすま

ぬはなの下かけ

何こともおもひ忘れて月のかけはなの色香を更

にめてつゝ

雪かともみゆる計に咲みちてにはに色ろふ花の

上の月

又もとの所へかへりつゝ盃のめくる餘り人〻

手折し花を冠にかさす我にも右のおほい臣の

かさして

さかつきのめくれるまゝに庭さくら手折し花を

われも挿しつ

たもとにも匂ひとゝめん手折つゝ花をかさして

うたふ宮人

何かとなかき酒宴になりぬるほとに

かへるへき家路わすれていつ迄もはなにめくら

す春のさかつき

程なく警固も揃ぬれは名殘おしくもかへらん

とて

いつまても何わするへきこの殿の花さくら木の

今日のなかめは

名殘あれやあかぬ心を木の本のはなにとゝめて

かへる夜の空

安政二乙卯年仲春仲四日

於陽明家感花宴面白慶悅之餘詠之

百廿二代孫

御名

〔公宴御會寫〕

二月十四日御遊御當座

絲櫻

糸さくら春の手引の永き日もくり返し花のなか
めろへつゝ

春懷

皆人のこゝろも花の紐とけてへたてぬ中の春の
さかつき

同日御遊御當座 後座 花映日

さく花に空もかすみて香に匂ふ日かけのとけき
春へなりけり

〔後勁槐記〕二月十四日辰半刻許内々渡御陽明家 有仰

雨役各參仕殿下依御所勞御不參内大臣殿御參先御座小書院其后移御寢殿右大臣殿爲沙汰撤紫宸殿代御座敷疊設御帖御茵尤殿下御内談之由仍自議奏無申殿下事又不仰職事昨日廣幡參陽明家示合且御塞等被點見女房祇候中略和歌御當座二首通題絲櫻春懷雅久卿撰進昨日有仰右大臣殿以下參進殿下雖不參賜題在假皇居之輩御座後奉行配御題御陪膳源大納言役送通善朝臣奉行左大辨宰相今日御當座御無人有別仰兩三輩參仕申半刻許召男方供御膳御陪膳右大將權大納言光成源大納言德大寺大納言源中納言御手長經之一人也一同有仰於御前賜酒肴天酌數度于時前庭絲櫻盛開臨暮月勻木陰右大臣殿種々有獻物又於御前御慰可頂戴臣下一同被送臺物頗大一臺すもし盡一臺鯛鱧海老生作數盃之後郢曲謠等有之尤微音更亦組題三十首有御當座奉行源宰相中

將題者同初座子刻頃還御

〔實久卿記〕二月十四日丁未晴時々小雨申刻後晴今日有召午刻後參皇居今日内々渡御于南殿代巳初刻渡御此亭絲櫻盛也有叡覽申刻許召御前内々有和歌

當座御會通題二組題三十首飛鳥井前大納言撰進之

源大納言被供御題右大臣以下賜參上歌人予御題絲櫻春懐以上通題寄雪花組題其後内々有御宴供御膳御陪膳人々右大將以下替々被候右大臣以下各賜之杯酌數巡有天酌御雜話有之入夜月明照花添御興了子下刻御宴了還御右大臣以下各供奉如例付女房畏申退出于時丑初刻也今日殿下不參給

〔俊克卿記〕二月十四日丁未晴時々小雨今日陽明家へ女房往來實ハ内々渡御也予卯半刻參入絲櫻滿開也御興宴有之御當座有之下略

〔按〕後亦南殿代に渡御和歌御會あり左に御製の二三を謹錄し併せて其記事を類擧す

〔公宴御會寫〕

三月四日御遊御當座惜花

散すもあれ花はいく春かはらねとことし見はやすわれを思はゝ

五月九日御遊御當座郭公過

朝くらや木の丸とのにあらすとも名のりてすきよ山ほとゝきす

同月二十八日御遊御當座述懷依人

深き淵うすき氷のいましめにひゝにわか身をかへりみつゝも

〔後勁槐記〕三月四日辰刻過内々渡御（予御塞點檢當番卿幷武傳聽長卿等及近習供奉）百首組題有御當座（御陪膳基豐卿送役通善朝臣雅久卿撰進奉）行爲理卿於小書院有御座（御製五首闕白以下點者親王丞相大中納言三首參議散三位殿上人二首）御作法ハ右ノ御手ニテ一枚ツゝ御取遊ハシ左ノ御手ニ御移シ遊ハシ取重テ右御手ニテ御懷中飛鳥井門弟左ノ手ニテ一枚ツゝ取右ノ手ニ移シ取重テ懷中冷泉門弟右ノ手ニテ一枚ツゝ懷中アトノ一枚ハ懷中セス持退陽明門弟烏丸門弟等皆御作法ニ同シ（二條流定也）

〔聰長卿記〕三月四日陰夜雨辰刻過近衛殿へ渡御御廊下御通行也（御劍隆韶朝臣廣橋前大納言御前行右大將予近習衆修理職奉行二人等）供奉百首（探題）御當座（予御題三也）酒菓拜領

〔實久卿記〕三月廿四日丁亥雨辰下刻晴今日巳下刻和宮令參皇居給（予御隨從參上如例）今日内々渡御于南殿代辰刻許出御云々敏宮令參皇居給兩宮同令參南殿代給（予不退出直伺候）未下刻召御前内々有和歌當座御會組題（五十首）左衛門督撰進之（中略）亥刻許還御云々

五月九日庚午今日内々渡御于南殿代

廿八日己丑今日内々渡御于南殿代也辰下刻出御

供奉如例未下刻召御前有和歌當座御會關白以下
參上人々歌人賜之組題勅題百首
六月十七日戊申今日内々渡御于南殿代也辰下刻
出御供奉如例未下刻召御前有和歌當座御會（中略）子
初刻還御
廿九日庚申今日内々渡御于南殿代（辰下刻渡御）殿下以
下參上人々如例（中略）賜酒肴右御所ニ出御殿下以下
被候杯酌數巡有天酌（中略）亥下刻還御供奉如例（但殿下座）
（主宮内相府早出）
七月廿三日甲申今日内々渡御于南殿代也辰下刻
出御供奉如例未下刻召御前和歌當座御會有之（中略）

還御亥下刻云々
八月七日丁酉今日内々渡御于南殿代辰下刻出御
供奉如例未下刻召御前和歌當座御會有之（中略）子初
刻還御

〔附錄〕

〔久我家記〕三月二日於御前申上過日陽明家渡御之
砌入夜餘程移漏ニ付來四日被爲成候ハヽ夜分御
早還御被爲在候樣申上之處於上モ御悅成タケ御
早還御被遊トノ御沙汰也幸甚

〔按〕九月廿日十月七日も亦南殿代に渡御あり
別に其日に掲く

十五日戊申假皇居に依て涅槃會の捧物を停む

〔外様言渡〕正月十五日來月涅槃於當年ハ可不及捧物之旨源大納言被申渡候事

〔按〕涅槃會の事は弘化四年二月十五日及明年二月十五日の條參照すへし

二十三日丙辰頻年異船渡來去歲內裏燒亡諸國地震等の事を以て伊勢一社奉幣日時定の儀を行ひ即日使王神祇伯資訓白川等を遣して幣帛を奉らしむ

〔言渡〕二月廿二日兩宮神寶有御覽內々之儀小御所代神寶設上段御茵供中段事具先關白殿內覽專奉行職事沙汰其後御塞殘番御點檢宜旨言上兒出御男房不候御前女房沙汰御覽訖入御解御塞職事等神寶如元納辛櫃明朝迄於調進方守護旨奉行被屆

廿三日辰一點許可始陣儀被仰出頭辨申渡小時勘文以掌侍奏聞同刻半過出御之旨同上向々申渡先宣命草附內侍奏覽了出御于小御所代宣命御覽御服此間告使還參奉行言上先是宣命返給上卿退出之後早速諸司出拂御門閉出御方警固附武士以下令廻候以兒申上御手水女房奉仕次渡御中殿代於西廂御拜御座南第一間向巽方其後還御附武士以下退申渡

巳半過御幣無異發遣之旨神宮上卿奉行辨等言上以表使申入

〔實萬公記〕二月廿三日伊勢一社奉幣日時定幷發遣

上卿右大臣（忠熙公）參議右大辨宰相（資宗）辨胤保朝臣（頭右中辨）王使神祇伯從四位下兼行侍從資訓王中臣正三位行神祇大副兼伊勢權守大中臣朝臣教忠齋部從五位上齋部宿禰能弘奉行職事光愛朝臣（頭左中辨）王使累年用代官（兵庫寮川越家爲代）今度因舊貫被用王氏正官可謂珍重（聰長卿被勘進神祇伯爲王使例人車記仁安三年十二月廿九日公卿）（勅使王神祇伯從四位下顯廣王）日時定陣儀吉時巳刻云々然而早速被行之依假皇居以近衞家中門廊爲陣座去年以來已如此陣儀不及見辰下刻於小御所代著御御裝束（山科前大納言言知池尻三位）（延房等侯之）御手水女房供之了出御于清凉殿代西廂有御拜了入御

仰詞

近年夷船度々渡來已去秋近海來京畿程不遠人情不安加以六月十一月畿內并諸國地震津浪之變災餘動未止愈深被惱宸襟因茲神明早施冥睹可爲天下泰平寶祚長久武運延長國體安穩萬民娛樂之由宜令作宣命

伊勢奉幣使發遣儀

上卿著仗座（兼日依奉仰直端）參議著橫敷座

次上卿令官人敷軾職事來仰仰詞

次上卿令官人召辨仰仰詞

次辨進日時勘文上卿披見

次上卿令官人傳仰外記可持參筥由外記持參筥置上卿前

次上卿入勘文於筥

次上卿令官人召職事賜勘文仰可內覽奏聞由

次職事奏聞訖返給上卿披見職事仰仰詞

次上卿令官人召辨賜勘文辨披見結申上卿仰仰詞

次上卿令官人召外記返給筥此便仰神祇官使使可催儲由

次上卿令官人召大內記仰宣命趣

次職事來下內藏寮請奏上卿披見職事仰仰詞

次上卿令官人召辨下請奏辨披見結申上卿仰仰詞

次大內記進宣命草入筥上卿披見

次上卿令官人召職事賜宣命草仰可內覽奏聞由

次職事奏聞訖返給仰可令淸書之由

次上卿令官人召大內記仰可淸書由

次外記參小庭申使王御馬之事

次大內記持參宣命淸書入筥上卿披見訖賜內記

次上卿起座進弓場內記持筥相從附職事奏聞此次奏使王御馬事

次職事奏聞訖返給仰使王御馬事聞食由

次上卿賜筥於內記向神祇官代

次參議起座

神祇官代儀

先辨史以下著北廳代座有幣裏之事

上卿參向入南門著座辨外記史出立同門外上卿向

辨相揖

次上卿令召使召辨問幣物具否辨申具由

次上卿令召使召外記問使使參否外記申候由此次

仰可賜使王御馬之由

次上卿令召使傳仰可持參宣命之由內記內記捧宣

命立側

次上卿以下移著北廳代座內記持宣命相從置上卿

前退著座

次上卿仰辨令催發遣御幣發遣上卿以下平伏

次上卿令召使召使王賜宣命

次上卿召內記令撤筥

次上卿起座（先是辨以下起座出立南門外）於南門外向辨相揖退出

〔後勁槐記〕正月十三日一社奉幣兩宮別幣（御鏡金銀幣行事官）

（出納調進）之外被准弘安四年例於公卿勅使ハ荒祭宮ヘ

獅子形可有御奉納哉愚存注一紙覽殿下之處（里亭）召

御前小安殿代無其所且弘安例ハ爲蒙古國征伐御

祈也今度ハ爲平穩御祈也被立三姓使可然哉并使

王是迄河越被仰下候ヘ共非王之間此度白川參向

可宜候幼少故可爲如何哉權大納言被申候ヘ（尼職）
掌之儀宣命之趣告申候ハヽ宜候且又下行公卿勅
使之例（三百石）ニテ關東濟來候ヘ共當時之儀禮はろ
のをてらむよりはむしろけんぜよト經書ニアリ
然ハ公卿勅使モ可被立之處殿上之王使可宜候又
又不遠辛酉甲子可相回候其節ニハ獅子形御奉納
可有之併尙御時議可伺由被命
此獅子形平將門亂之時初御奉納其後度々御奉
納有之自何頃哉無之中絶之處享和元年公卿勅
使之節御再興ニテ御奉納天保度彼宮燒亡之節
燒其后未無之間予可有御奉納所存申上也然而
殿下不令同意給不力及者也
廿八日一社奉幣發遣日時內勘文賜御點（二月廿三日丙辰時）
（巳）但昨日殿下垂命ニハ日時定陣之儀日時召內勘
文三日賜御點奉行胤保發遣廿三日奉行光愛朝臣
然處寬保元明和八等各日時定同日發遣ニテ別日
陣之儀無之但由奉幣ナトニハ相分レ候例有之候
源亞相與武傳示談殿下ヘ行向告事由以左馬權頭
申上日時定同日發遣（廿三日）御治定相成了
二月廿二日兩宮神寶御覽先小御所代上中下段四
方懸御簾（卷之）次神寶行列（出納行事官）職事等神寶設上段
御座（御茵）設中段事具先殿下內覽其後出御（女房沙汰）兩役

不召御前殿下内覽計不被候御前職事同前暫而叡覽相濟職事
等如舊納辛櫃明日迄於調進方守護
廿三日伊勢臨時奉幣發遣也辰刻許右大臣殿著仗
座直端右大辨宰相資宗候横敷胤保在床子藏人頭參陣稀也關白命
有之奉行伺定神慮歟職事光愛朝臣仰仰詞伊勢奉幣日時令勘申ヨ云々
日時清書勘文去日陰陽頭清書附光愛朝臣朝臣預
申今朝内々以六位藏人渡座頭史仍晴雄朝臣無參
仕依下行無之也勘文附掌侍奏聞返給上卿披見仰仰詞勘申
ニヨレ了卷調文之後又仰云近年夷船云々宣命大内記夏長朝臣作進
草以掌侍奏上卿不參弓場於陣附職事其後出御于小御所代于
時上卿立弓場附宣命於光愛朝臣朝臣參小御所代

奏直奏使王御馬之事同申之次著御御服山科前大納言池尻三位等勤仕了御
手水女房沙汰告使歸來旨奉行言上當番以兒申上次渡御御裾光愛
朝臣予御前行經之供御陪草至朝餉邊御其後職事供奉雨役近習在詰云々御拜如舊年例幣
了還御准初
今日幣物及上卿以下向神祇官代路出石藥師門經
梨木町高倉裏門之處板圍飛鳥井被沙汰之由寺町丸太町橋吉田道云
云如賀茂祭路頭不淨之所々板圍薦包之由也
宣命上卿召伯於膝突賜之於樓門下授中臣中臣持
向神宮讀上官符ハ伯持參之由發駕以下守位次之
由今夜草津宿之由
上卿以女房奉書賜御肴攝家大臣上卿之時每度如此

〔聰長卿記〕正月廿九日一社奉幣下行之事所司代へ
以一封申遣如左
伊勢一社奉幣使此度ハ格別之御願被爲在候御
事故三姓之内王使白川侍從へ可被仰付且又公
卿勅使之節ヨリハ御減ニ候得共神寶モ御奉納
被爲在候間寛保度之二百石ニ加增凡二百石計
有之候樣致度猶委細ハ追テ可申入候間宜御取
計有之度候事
二月二日一社奉幣下行二百石寛保例王使白川且神
寶等有之二百石增所司代承知也下行草帳可被申
付頭辨へ月番被示

十一日一社奉幣金銀御幣料金判金二枚從御内儀被出銀二十枚從口向
調獻之内白銀二十枚兼テ附武士へ申渡置新吹可然但難調時
ハ洗清尤目方正敷分可然申付置丁銀洗清目方正如數相整候旨賄頭申
出議奏へ申入
〔實麗卿記〕二月廿三日丙辰晴今日一社奉幣發遣近年
異船度々渡來去年内裏炎上地震諸國津浪等依御願云々也上卿右大臣忠熙參議
右大辨宰相辨胤保朝臣奉幣使四姓王資訓王中臣敎忠卿忌部能
弘卜部如例幣云々奉行光愛朝臣云々宣命官符等續左
天皇我詔旨止掛畏岐伊勢乃度會乃五十鈴乃河
上乃下津磐根尓大宮柱廣敷立氐高天原尓千木
高知氐稱辭定奉留天照坐皇大神乃廣前尓恐美

恐美毛申賜者久止申皇大神乃厚御恩尓因氐食國乃
天下無事久無故久安賜比治賜比志尓頃年夷船渡
來此乃神國乎汚辱古止毛有倍久也者止恐理給比患倍
給比志尓不量毛去年乃四月尓祝融爲崇氐内裏炎
燒奴引氐及民屋利又六月尓畿内乃國地震氐不
輕其秋又夷船攝津國乃海岸尓來利著奴禮止不日
毛飛帆氐伊豆乃下田尓向止聞食須間尓十一月
上旬尓畿内與利東西南海乃諸道乃國々浦々地儀
又震比津浪擊揚氐或者城郭顚倒禮或者民舍毀
壞氐公民乎損害奴爾後又烈風揚浪氐彼夷船毛
沈沒止聞食須是皇大神乃廣助厚護奈利止悅比畏

利給布曾毛曾毛加久災變乃重氐來古止者朕加薄
德尔依氐志加殊尔御世御世乎經氐未來夷乃屢來
古止者若久者覬覦乃志毛有良牟止加止寢氐寤氐毛深久恐理
深久愼給布神奈加良毛此狀乎聞食相宇豆奈比
給比相扶給比天縱來奈牟災奈利止毛未萌尔撲滅志給古止
者偏尔皇大神乃御助尔可有止牟奈故是以氐吉日
良辰乎擇定氐王神祇伯從四位下兼行侍從資訓
王中臣正三位行神祇大副兼伊勢權守大中臣朝
臣教忠等乎差遣氐齋部從五位上齋部宿禰能弘
加弱肩尔太織取懸氐禮代乃御幣尔金銀乃御幣
御鏡等乎相副氐持齋者利令捧持氐奉出給布掛畏

岐皇大神此狀乎平久安久聞食氐天皇我朝廷乎
寶位無動久常磐堅磐尔夜守日守尔護幸給比氐國
家安穩尔萬民娛樂尔恤助給倍止恐美恐美毛申賜者
止申久
太政官符伊勢國
應預奉兩大神宮幣帛并神寶等事
使王神祇伯從四位下兼行侍從資訓王
中臣正三位行神祇大副兼伊勢權守大中臣朝臣教忠
右右大臣宣奉勅爲奉
兩大神宮幣帛并神寶等差件等人宛使發遣如件國
宜承知依宣行之符到奉行

正四位上行右中辨藤原朝臣判
修理東大寺大佛長官從四位上行中務權少輔主殿頭兼左大史小槻宿禰判奉
安政二年二月二十三日
〔非藏人日記〕二月廿三日丙辰晴神宮一社奉幣日時
定陣之儀被用陽明家寢殿如去年九月例幣陣上卿近衛右大臣忠熙
公參議日野右大辨宰相資宗卿大內記東坊城夏長
朝臣奉行職事柳原頭辨光愛朝臣此餘神宮上卿辨
參侍王使白川神祇伯資訓王齋部中臣使參向如例
幣陣被始辰一刻過已前御門外人留之事修理職へ申付
兼日番頭代ヨリ有命修理職豫內玄關邊ニ待居奉行衆之命ニ任セ申付也陣終之節同上出御
辰半一刻過中殿代ニテ宣命奏聞有之陣終而上卿以下

自陽明家寢殿被行向于神祇官代此時於中殿代西廣椽南殿代有御拜圓座數段一切無之自神祇官代直ニ發遣

〔久我家記〕二月三十日一社奉幣使歸京之日也子刻迄ニ歸京候ハヽ雖入夜今晩中可言上之旨殿下被示仍祭主へ申入王使以下ハ頭辨へ申遣酉刻過歸京被屆早速參內言上一如例幣也

〔備考〕

〔聽長卿記〕正月十日異船二艘志州鳥羽浦相見候處飛帆紀州浦之方相廻候由注進候內々之旨肥前守○附武士申出殿下へ申入十二日肥前守申之紀州浦候處更ニ東へ走リ候全ク魯西亞船ニ候舊冬船之行衛相尋候事ト被察候

十二日伊勢浦異船四艘相見候餘程大船之由何國之船ニ候哉難相分候旨昨日町奉行噂候由肥前守噂申後聞清國之船全津浪ニ出逢飄著之由無相違旨也

三月二十日目付大久保右近將監上京中大隅守○附武士役宅へ來面會異船御要害臺場從攝州至播州彼是出來可仕又守衛之大名モ追々可被仰付候間於京都必々御安心被爲在候樣無急度御噂申上候旨大隅守申之殿下へ內內申入置

孝明天皇紀卷五十八

安政二年乙卯三月三日丙寅 鬪鷄を停む

〔俊克卿記〕三月三日丙寅雨依假皇居無鬪鷄獻上參賀如例

〔勝長卿記〕三月三日丙寅今日鬪鷄御覽之處於當年者無此儀仍廻文不到來云々依皇居御狹小無其所故歟

十三日丙子 妙心寺開基關山に宸筆の追諡を賜ふ

〔言渡〕正月廿八日妙心寺關山國師加號之事來未年遠忌

右衛門督被附舉狀一卷例書三通綸旨五通殿下內覽濟由日限八

十二日ニ願度綸旨白紙ニ願度旨被示二月十七日以龜丸申上

依請勅許近日可賜宸翰被仰出

二月廿日妙心寺開山國師加號草大内記被附以左馬權頭上被止御前旨被仰出

三月廿五日妙心寺開山關山國師五百回忌加號宸翰以左馬權頭被出右衞門督召設兩役列座於八景間代授之

〔勝長卿記〕三月廿五日戊子家君○愛長依召令參内給妙心寺開山國師號御宸翰賜之議奏傳奏列座於八景間代被相渡當番議奏正面東西ニ傳奏議奏列座之由自當番議奏橋本前亞相被相渡云々御宸翰左之通檀紙上包ヒモ等同紙也○宸翰寫闕く左に其追錄を收む

安政六年九月十日去安政二年三月廿五日御宸翰降下ニ相成其節從家公被命御宸翰寫御取寄ニ相成候處頓ト不見當候ニ付今日一山へ更御宸翰寫所望ニ遣尤以家僕狀申遣云々則一紙直ニ持參候事如左大奉書一枚卷地也

本有圓成佛心覺照大定聖應光德勝妙自性天眞國師其道德歷朝稱之今當五百年遠忌朕亦時染兎毫累謚曰無量光國師

安政二年三月十三日

微笑塔下

〔按〕無量光の上に放の字脫歟姑く原寫に從ふ

又文久三年に至り妙心寺派の僧に諡號を賜へり今左に附收す

〔當職内覽中之記〕文久三年二月十九日從高辻大内記殿妙心寺派雪堂和尚禪師號勅許ニ付勅書草并清書等内覽

勅妙心開山放無量光國師遙胄雪堂和尚佛眼神足大龍奮迅平林護國曾孫寶珠收歸石室引宗派於洛西源學徒向道注慈雨於關左野賢哲欽風示寂二百五十年忌辰將近遺化百千萬億刧光明曷窮不堪叡感諡曰神照慈眼禪師

文久三年二月十六日

三月四日高辻少納言殿御出妙心寺派禪師號勅書草清書等内覽

勅正法正胤護國禪師宣揚祖宗教撫人傑陰資王度其偉矣其嗣慈功照其孫佛眼化儀各別道德維同宜哉法門師表朝家所稱朕前日聞其曾孫雪堂之風追感之餘簡以徽號不日又奏其遙孫要峯念座元行業者夫傳心印印眞空知見月朗紹先覺覺後覺慈愛海深其遊戲也金龍引金風其文彩也寶樹連寶珠是可嘉尚仍諡寶覺佛印禪師

文久三年二月廿二日

〔言渡〕文久三年二月二十日菅少納言被附雪堂和尚禪師號勅

書草内覽濟由以藤丸伺如伺申渡候小時同朝臣清書獻上
内覽濟寫添以藤丸上被止御前候旨被仰出申渡
廿一日妙心寺諡禪師號勅書以藤丸被出藏人左少
辨召設於八景間相渡御硯蓋以兒返上
三月四日大内記被附要峰和尚禪師號勅書草内覽濟由以篤丸上如
伺被申出申渡候小時同朝臣清書獻上寫添以同兒上
被止御前其由申渡五日勅書以篤丸被出藏人左少辨召設於八景間相渡

十五日戊寅躑躅御覽臨時和歌御會

〔公宴御會寫〕

三月十五日御當座樹陰卯花

生しけり月さしいらぬこの本にまかふ光やさけ

るうのはな

同日御當座後座躑躅へ

へたてなく内まて照す岩つゝし花に火かけもろ

むけてろみる

〔久我家記〕三月十五日今日内々御當座臨期被催予

暫殘居候樣以兒被仰出今日躑躅御花見云々關白

右大臣座主宮内大臣等被召勅題之方○樹陰卯花御座

有之後座之方無御座短冊賜番所也卽詠進

〔中將内侍房子記〕三月十五日内〻當座にてあ

らせられゝ關白殿右府殿座主宮殿内府殿出座

あらせられゝ庭つゝしの花を覽にてあらせら

れは一てん進ぜられはにき〳〵しくは樂もあらぜられはは退出のぜつはつゝみ物進ぜられは今日のは當座は題戴はなり

〔按〕後座の御題は（題者冷泉左衛門督）鄙躅二十首にして初句の頭に「やりみつのなかめをろへてつゝしさきつゝく」の一字を用ふ

十八日辛巳下御靈社正遷宮權右中辨藤原長順（葉室）之に莅む是日新造内裏木作始地曳の儀を行ふ

〔公卿補任〕二月九日下御靈社正遷宮日時定（消息）上卿萬里小路中納言辨長順奉行胤保朝臣

三月十八日下御靈社正遷宮辨長順參向

〔按〕下御靈社は京都寺町通丸太町の南に在り崇道天皇伊豫親王藤原夫人吉子橘逸勢文屋宮田麻呂吉備眞備藤原廣嗣菅原道眞を祭り享保十七年十一月遺勅に因て靈元天皇を合祀すと云ふ（地誌提要）

〔非藏人日記〕三月十一日甲戌雨午後晴造内裏地曳木作始日時定陣之儀也上卿三條大納言實萬卿奉行柳原頭辨光愛朝臣辨葉室辨長順於陽明家寢殿陣被始（巳一刻半前）

〔實萬公記〕三月十一日造内裏木作始地曳等日時定也上卿實萬奉仰巳前刻參入于假皇居（裝束如常無文帶蒔繪劍）

紺地緒乘轅前駈二人衛府長雜色六人車副二人自餘如例更得職事告之後至近衛家四足門乘轅入四足門之後前駈二人擁傘下轅向入化德門代門中南脇切戸著仗座以中門廊擬之依雨經中門內砌上行事如次第訖從敷政門代以中門爲之退出辨在座仍揖過難雨儀砌上無路上官座狹少之故也聊存式法下砌南歩之後令取笠造內裏木作始地曳等日時定次第

上卿著仗座奥職事來仰仰詞造內裏木作始地曳等ノ日時勘ヘ申サシメヨ

次上卿移著外座令官人敷膝突如先度奉行之時不令敷之從當時之定也

次上卿令官人召辨仰日時事權右中辨此方ヘ仰詞如職事

次辨持參日時勘文二通一通禮紙上卿披見畢辨退

次上卿令官人仰外記外記ニ筥持テ參レ可持參筥之由外記持參筥上卿入勘文於筥置笏引寄筥入勘文了目外記外記退

次上卿令官人召辨內覽仰云內覽並奏奏聞畢返給辨持參御在所被免內覽歟上卿披見結申於筥內結之〔每度如此據愚昧御記〕又結一通辨仰詞勘申ニヨレ

次上卿下日時於辨辨欲起目止之辨結申辨結一通云日時予仰仰詞如初

上卿仰仰詞

次上卿令官人仰外記外記ニ筥取レ可撤筥之由外記撤筥

次上卿令官人撤膝突無此事

次上卿起座

〔實久卿記〕三月十一日甲戌造内裏木作始地曳日時
定陣也上卿權大納言實萬辨長順奉行職事光愛朝臣
來十八日巳刻木作始同日午刻地曳被仰出了
十八日辛巳雨巳刻計參皇居今日造内裏木作始地
曳也巳刻中山大納言大原三位前右大辨以上修理職奉行
等參向
〔造内裏御用帳〕三月十八日今日木作始巳刻地曳午刻等
也奉行參上中山殿重德裏松殿辰半刻頃少時從附武士案内有之
候趣從取次告來候旨申出且執次勘使修理職等先
へ令參向候ハヽ如何哉相尋候ニ付可爲勝手相答
候少時奉行參向巳半刻頃同伴中山殿重德裏松殿等也加勢非藏人等參向ナシ紫

宸殿前庭假屋ニ著座如圖先木造始引續地曳圖并規式手續
等在達帳無滯被遂直歸參午半刻頃無異儀被遂行候旨附議
卿光成卿言上且恐悦申上以表使申上如常

〔安政新内裏造營細記〕

木造始之式三月十八日

一玉女

右御殿地ニ荒菰ヲ敷神壇ヲ構向ニ幣ヲ建前ニ
神酒熨斗昆布鹽鯛ヲ備右ノ御規式被仰出次第
神主ノ棟梁衣冠ヲ著壇ニ向兩段再拜清祓仕祭
神勸請申捧神酒三度典供シ祝詞ヲ申奉幣散米
三度祈念シ祝詞ヲ申兩段再拜而退

一柱本

右御殿地ニ荒菰ヲ敷壇ヲ構向ニ幣ヲ立前ニ神酒熨斗昆布鹽鯛ヲ備木造始木直シ有之祭主ノ棟梁衣冠ヲ著壇ニ向兩段再拜清祓仕祭神勸請申捧神酒三度典供シ祝詞ヲ申兩段再拜而退次ニ墨壺曲尺直シ退次ニ墨掛糸引ノ棟梁三人衣冠ヲ著木造始木口割ノ式有之墨壺曲尺持入次ニ木直シノ棟梁二人かい木ヲ直シ退次ニ釿直シノ棟梁釿ヲ持出壇ニ向ヒ兩段再拜祝詞ヲ申散米木造始釿立三度祈念シ祝詞申兩段再拜而退次ニ釿直シノ棟梁釿ヲ持入

一御地曳之式

右御殿地荒菰ヲ敷向ニ砂三盛仕右ノ傍ニ鋤鍬ヲ置祭神勸請ノ御規式被仰出次第祭主ノ棟梁清祓仕鋤鍬ヲ以三盛ノ砂引平均候テ退尤右ノ砂ヲ除置御地形平均ノ節御殿地へ蒔申候下略

〔附錄〕

〔示羊記〕七月七日庚午禁中御造營御用懸勘定奉行石河土佐守去正月江戸發足勢州海岸泉州海岸等見分了昨日上京云々御造營御用掛一箇之大事也然而勢州泉州等海防見分相兼頗寛怠之事也當時武臣不敬都而如此是公家過寛宥之故也可歎

十九日壬午石清水臨時祭假皇居に依て宮中の儀を略し一舞を復す

〔公卿補任〕三月十九日石清水臨時祭（假皇居之間被略宮中儀）使左權少將實在朝臣宣命奏上卿二條大納言奉行胤保朝臣同夜於社頭御神樂

〔非藏人日記〕三月十九日壬午雨午刻前ヨリ晴石清水臨時祭也奉行職事頭辨胤保朝臣以下侍中總參使滋野井少將實在朝臣以下舞人加陪從陣上卿二條大納言殿以下參著於陽明家也御禊（卯半一刻過）出御于中殿代其儀訖而使以下被進前庭賜挿頭樂所發物聲云々自餘御作法訖而（辰刻）入御（庭座東遊無之）使以下被復陽明家

〔實麗卿記〕三月十九日壬午今日石清水臨時祭也一如昨年北祭云々宣命奏聞上卿二條大納言（齊敬）有辭別兩度奏聞云々實美朝臣被仰一舞之事一如去冬云々今日宣命續左

天皇（我）詔（止）掛畏（岐）石清水（尓）御座（世留）八幡大菩薩（乃）廣前（尓）恐（美）恐（美毛）申賜（倍止）申（久）去天祿元年（與利）始天奉出給（布）宇都（乃）御幣（乎）正四位下行左近衛權少將藤原朝臣實在（乎）差使（氐）令捧持（氐）東遊走馬調備（氐）奉出賜（布）掛畏（岐）大菩薩平（久）安（久）聞食（氐）天皇朝廷（乎）寶位無動（久）常磐堅磐（尓）夜守（尓）日守

護幸（倍尓）給（比）天下國家（乎毛）平（久）安（久）守幸賜（倍止）恐
恐（美毛）申賜（者久）申辭別（伎）申（久）去年（乃）四月（尓）不
慮（毛）內裏火（乃）災（尓）罹（利）外（尓）行幸（志）給（伎）便宜（乃）
所（尓毛）假（乃）皇居（止）定給（倍者）今日（毛）殿庭（乃）敷設（乎）
備（伎）禮（乎）盡（古止乎）得給（者禰止）御幣已下（者）任例（尓）奉
進給（布）掛畏（岐）大菩薩此狀（乎）平（久）安（久）聞食（止）恐
恐（美毛）申賜（者久止）申

安政二年三月十九日

宣命奏聞上卿二條大納言（齊敬）

使左少將實在朝臣

舞人侍從博房左兵衛佐勳光侍從實美左馬權頭敬

直藏人左將監大江俊堅藏人左將監大江俊昌

加陪從左少將基安朝臣右馬權頭繼仲朝臣備中守

俊良（近衛家諸大夫）右馬助（有栖川宮諸大夫○原記名を脫す其家傳を檢するに粟津義節なり）

所作陪從哥忠誠篳篥季資笛景繁和琴久嘉

人長安倍季愛

（久我家記）三月十九日今日石清水臨時祭也中殿代

修理職勘使等檢知屆候卯半刻計於小御所代著御

御服（山科前大納言奉仕言繩朝臣刷御前）次御手水（女房奉仕）渡御中殿代

女房供奉自當間著御御禊御座（孫廂代北面供御座關白依不參光愛朝臣執御裾）

兩頭褰御簾次胤保朝臣供御笏光愛朝臣供御贖物（長順盆供）

宮主良祥朝臣持大麻跪切妻下光愛朝臣取之參進
供之吻御訖返賜光愛朝臣退授宮主次宮主著庭中
座次使左權少將實在朝臣同著座次舞人（一四行事）引立
御馬次有御解除事宮主奉仕祓詞訖退（陪從於弓場代邊發物音）
次舞人引出御馬此間撤御贖物（最前人候之）次使進案下
捧御幣御拜御拜訖使置御幣退次胤保朝臣進申出
御笏次入御（准初）次於弓場代經之頒挿頭花（出納取傳使舞人等）
（每人頒之陪從取集授一加陪從於人長者出納頒之）次胤保朝臣於朝餉簾下
奉仰降南廊代召實美傳仰可令奉仕一舞之由（舞人在下）
（侍代邊）次上卿二條大納言著仗座（以陽明家中門廊爲陣代）胤保朝
臣仰宣命辭別之趣（今度假皇居之間被略宮中儀幣物已下任例使可有發遣可令載）

（宣命辭別）上卿移端座召大內記（夏長朝臣職）仰仰詞次少內記（職孚）
進宣命草（○原記此間辭別を註す實麗卿記同文）以胤保朝臣奏聞返給
仰可清書之由次上卿召內記仰清書事內記退進清
書次上卿進立弓場代以胤保朝臣奏聞返給仰御覽
訖由次上卿還著座召實在朝臣賜宣命訖退出次使
進發（以陽明家四脚門外擬櫛笥小路）如例（但依假皇居無北陣之儀）向社頭
〔按〕石清水臨時祭恆例と異なる所あるを以て
特に之を揭く又今年の賀茂祭近衛使の調度
小異あるのみにて宮中の作法等例年の如し
故に別揭せず左に其記事を附す
〔實麗卿記〕四月十七日己酉晴今日賀茂祭也近衛使

左中將定功朝臣（著染束二藍半臂萌黃下襲蘇芳袴）皇居之儀如例年云々又使不具牽馬（唐鞍不置方宜旨）傘用菅是等之事殿下御命云々（御假皇居故云々）

二十七日（庚寅）郢曲御稽古始前權中納言源有長（綾小路）之に侍す尋て催馬樂及神樂を習はせ給ふ

〔後勁槐記〕三月十日郢曲內々被爲遊度思召候按察使可被申上尤致急度候儀ニハ無之旨殿下被傳仰云々（十一日當番萬里小路召有長被申渡）

廿七日按察前中納言郢曲被聞召ニ付參上（獻譜面）即召御前

主上郢曲被遊候儀稀事歟光格帝內々ハ被遊候由所傳聞也享保之頃之御例歟之旨云々

五月十五日按察前中納言參上此頃催馬樂御稽古被爲有候ニ付笏拍子（入錦袋納笛）新調有之ニ付獻上不苦哉殿下へ被申入候由內覽之處無子細被命候ニ付獻上幷安名尊譜（アナトノ）無御沙汰（ヒ）候へ共書付同上被附以左馬權頭上則召御前

〔中將內侍房子記〕安政三年四月十一日あやの小路あぜち殿より內ゟ神樂庭火（ヒ）ゟ傳授申上らるゝ

〔言渡〕安政四年十一月九日按察前中納言面會今日神樂星ノ曲御譜面初テ獻上之旨但御傳授ト申ニテハ無之候右之儀殿下太閤等へモ被申上候處御

當役ヘモ可被申上兩公御命有之由ニ付被屆

二十九日壬辰大覺寺前大僧正亮深の病危篤に至るを以て准三宮及牛車等の宣旨を賜ふ

〔公卿補任〕三月廿七日准三宮牛車等宣下前大僧正亮深消息

上卿右大將辨長順奉行胤保朝臣

〔有栖川宮日記〕三月廿九日壬辰大覺寺瑜伽定院准三宮宣下一昨廿七日相濟今午刻過中務大輔久隆朝臣衣冠單詔書持參中務少丞隨從束帶設之間ヘ案內中略申次右馬助義節衣冠單出會之處准三宮施行詔書持參候間御加署可給之旨被申伸中略詔書寫依御所望被上

勅不旌德則勸善之道缺焉不致賞則報功之典廢矣爰前大僧正亮深身出華胄夙入峨山其性寬容其風嶮峻常轉法輪輓回佛祖太古之風大挑慈燈照破勞生長夜之暗況又齡及七旬德聞十方誠是法海之寶筏密藏之金樞嘉其徽猷應其令聞不加崇範恐違舊典宜准三宮加年官年爵授封戶千戶一遵先式主者施行

安政二年三月廿七日

二品行中務卿幟仁親王宣

正四位下行中務大輔臣卜部久隆奉

正五位下行中務少輔臣藤原資生行

〔實久卿記〕三月廿七日庚寅今日瑜伽定院前大僧正亮深（大覺寺先住）准三宮聽牛車

廿九日壬辰瑜伽定院准后自先達所勞到今日大切之由自武傳卿被示予披露後刻今日申刻薨去旨同上予奏之依之自今日三箇日廢朝被仰下（不被下御簾）

〔聰長卿記〕三月廿九日瑜伽定院准后所勞甚六个敷旨（中略）申刻許薨去之旨坊官屆（無容體書）右府公（○近衛忠熙）叔父假服屆等被附（中略）右府公直別勅出仕被仰下是寢殿被用紫宸殿代之故也

〔示羊記〕三月廿七日庚寅瑜伽定院（大覺寺門跡隱居）初春之頃實遷化然而有子細于今不露顯今日准三宮宣下（消息）上卿右大將云々

廿九日壬辰瑜伽定院准后宣下勅書今日持參借請輪門里坊於此所被請久隆朝臣參向此所云々入夜（酉半刻許）薨奏右大臣殿（叔父也）假服屆書即別勅除服出仕被仰下其後廢朝云々

是春地數震す

〔言成卿記〕正月二日地震微動（二度計）

四日地震微動

六日地震微動

七日地震微々

廿九日地震微々

二月一日地震二度伏見邊聊嚴重云々

四日降雨地震

五日降雨微震

十七日陰晴不定地震三个度計云々

三月五日陰晴不定地震聊嚴重

廿四日晴地震二度